

ホスピタル・プレイ・スペシャリストの行うプレイ・プレパレーションの実際
～検査や治療に対して非常に不安が大きかったA子への支援を通して～

小島広江¹⁾ 松平千佳²⁾ 岡田節子³⁾

The method of Play Preparation used by Hospital Play Specialist
A case study of a child who was emotionally distressed by medical procedures

Chika Matsudaira (University of Shizuoka Junior College), Hiroe Kojima (Seirei Hamamatsu Hospital),
Setsuko Okada (University of Shizuoka Junior College)

- 1) 聖隷浜松病院 (HPS, 保育士)
- 2) 静岡県立大学短期大学部 (社会福祉学科, 教員)
- 3) 静岡県立大学短期大学部 (HPS 事務局, 研究員)

連絡先住所 〒422-8021
静岡県静岡市駿河区小鹿2-2-1
静岡県立大学短期大学部 松平千佳
電話 054-202-2653
メールアドレス matudair@u-shizuoka-ken.ac.jp
研究ノート

ホスピタル・プレイ・スペシャリストの行うプレイ・プレパレーションの実際 ～検査や治療に対して非常に不安が大きかったA子への支援を通して～

The method of Play Preparation used by Hospital Play Specialist

A case study of a child who was emotionally distressed by medical procedures

論文要旨:イギリスにおいてはホスピタル・プレイ・スペシャリスト(以下 HPS と称する)が医療スタッフの一員として位置付けられており、プレイ・プレパレーションをツールとして病児の支援を行っている。本研究ではイギリスの HPS 養成プログラムを参考として日本で実施された HPS 養成教育講座を受講した保育士が、小児医療現場で行ったプレイ・プレパレーションについて事例を通して紹介し、その意義と有効性を明らかにした。事例は、通常の発達レベルにある7歳の女児で、生来、尿失禁に悩まされており、腎盂腎炎のため入院した際に左重複腎盂尿管を疑われ、尿路の精査が必要と判断されたが、検査・治療に対して強い不安と嫌悪感を示していた。この女児に対して、プレイセッション、写真入りのプレパレーションブック作成とその利用、検査室への探検ツアー等のプレイ・プレパレーションを取り入れた。

その結果、以前の女児の様子からは想像もつかないほど、落ち着いてリラックスした様子で検査・治療を実施することができ、医療スタッフ一同にはプレイ・プレパレーションの効果を再認識してもらうことができた。現在、女児の尿失禁は消失し、QOL が大きく改善された。

キーワード: Hospital Play Specialist(HPS), プレイ・プレパレーション, 遊び, 小児医療スタッフ

I 緒言

1. 問題の所在

遊びは子どもにとって成長や発達に欠かすことのできない活動であり、病児においても日常の遊びを保障し充実させることは重要である。また、遊びは子どもとのコミュニケーション手段であり、病院などの医療機関で遊べる環境を構成することによって、病児と医療者との円滑なかかわりが可能になる。

わが国の小児医療現場では、とすればこうした遊びのもつ重要性は度外視され、子どもに苦痛を与えたり、心理的不安状態に陥れたままで、治療が実施されたりしてきた。今日、小児病棟で働く保育士は徐々に増えてきているが、彼らは病棟で子どもを保育する役割は付与されているものの、医療スタッフとしては位置付けられていない。その一方で、子どもが入院や治療によって引き起こす心理的混乱や苦痛・不安に対処し、心の準備ができるようにするためにプレパレーションという技術が注目されるようになっている。

ホスピタル・プレイ・スペシャリスト(以下、HPS)は英国で誕生した専門職であり、医師や看護師とともに医療スタッフの一員として位置付けられている。HPS は遊びの持つ力を使って病児や障がい児にプレイ・プレパレーションを行うとともに、病児やその家族の支援も展開している。こうした英国の HPS の理論と技術を活用し、日本の病院や施設で生活する子どもたちに対し、プレイ・プレパレーションを行うことの意義は大きいと考えられる。

2. 目的

本研究は、静岡県立大学短期大学部で実施されている HPS 養成教育講座を受講した保育士が、小児医療現場で行ったプレイ・プレパレーションについて事例を通して HPS の活動を紹介します。その意義と有効性を明らかにすることを目的とした。

II 事例

- (1) 患児: A子(女児, 7歳)。
- (2) 発達状態: 身体的、認知的発達には問題ない。社会適応や性格にも特に問題ない。
- (3) 家族: 母, 妹, 本人。
- (4) 病歴: 生来、尿失禁に悩まされていた。
- (5) 入院: 腎盂腎炎のため入院した際に左重複腎盂尿管を疑われ、尿路の精査が必要と判断された。
- (6) 採血時の様子: 採血前の説明では納得しているが、直前になると恐怖心が高まり、処置室に入るまでも1時間程を要する。
非常に不安が強い。
- (7) HPS に対する小児科医師からの依頼内容: 排尿時膀胱尿道造影(VCUG)の検査を行う必要があるが、その検査に向けてA子にかかわってほしい。母親に検査の説明をしたが、A子に説明したことはない。採血の様子をみると非常に難しい検査になると思われる。

III 方法

HPSは、A子へ十分に今の状況や今後の検査の必要性を説明し、納得してもらって治療を進めていく必要があるため、他の小児医療チームと話し合いを持った。A子については今後も外科的治療が予測され、検査が複数回繰り返される可能性が高い。したがって、現在A子が示している検査や採血に対する強い不安や抵抗感は、本人にとって精神的に大きな負担であると同時に、医療者にとっても負担となっている。そこで、小児医療チームとしては、A子の病院に対するイメージを「嫌いな場所から行きたい場所」へ転換する必要があると確認され、HPSはA子の不安を取り除くために以下の方法を考えた。

1. プレイセッション

a. 遊びの計画 —長期計画—

膀胱尿道造影検査を中心に2か月にわたる長期の HPS による支援計画を立てた(表 1)。実際に検査が行われる7月7日までに5回のセッションを行い、それぞれの日に、プレイ・プレパレーションを実施していく計画である。計画は、少しずつ具体的な検査内容が分かるように組み立てた。

HPSが行うプレパレーションは、プレイ・プレパレーションであり、遊びの要素が含まれていることが前提となる。表1を見て分かる通り、遊びは複数用意し、A子自身が選択することのできる内容となっている。

表1. 遊びの長期計画

日付	プレパレーションの方法	遊 び
5月29日	遊びを通して、子どもとの信頼関係を作る	シャボン玉 風船作り(写真1)
6月5日	自分のクワニスドールを作る	人形作り 小麦粉粘土
6月12日	クワニスドールでHPSと一緒に遊ぶ(写真2)	メディカルプレイ スライム
6月19日	HPSが用意したプレパレーションブックに色を塗る(写真3) HPSを利用して検査の説明を受ける	絵の具
6月26日	検査室までキャラクターを探しながら行く 検査前はリラックスできる遊びの提供をする	探検ツアー(写真4)
7月7日	検査日当日。検査中は、気を紛らわすことや リラクゼーションできるようにする	万華鏡、絵本 好きな玩具

b. 日々の計画の一例

この日は信頼関係を再構築することが最も大きな目標であるので、A子の好きな遊びを複数用意した。この遊びを設定した理由は、本児が粘土や絵の具、風船等を用いた感覚的な遊びを好み非常にリラックスした態度を示すこと、及び本児が好みの遊びを HPS と共に展開することでラポールの形成が可能となると推測されたためである。

A子はまた、知っている歌を聴いたり歌ったりすることが大好きであり、特にタンバリンやカスタネットのリズムをとること、可能な音節を演奏することを好んだ。HPS と共に歌い、リズムを取り、演奏することでより親密感を深めることが期待できた。

表2. 遊びの計画 (5月29日)

テ ー マ	・心が和み気持ちが和らぐあそびを提供し、子どもが検査に立ち向かおうとする気持ち がもてるようにする。 ・プレパレーションを通して膀胱造影検査の必要性を感じる。
処置時の様子	・普段は、おしゃべり好きで明るい性格。採血前の説明では納得しているが、採血直前 になると不安・恐怖心が高まる
目 標	・遊びを通して子ども、医師、看護師、HPSとの信頼関係を作る。心地よい、自分の好き 遊びを選択してあそぶ。
支援のポイント	・「やってみたい！」という思いを引き出し、意思表示についてははっきり受け止める (自分で選択、決定できる場面)。
	やってみよう！
感覚を楽しむ遊び	小麦粉粘土 粘土 風船に粉を入れたものを作り、握って感覚を楽しむ 絵の具 シャボン玉
音楽的遊び	タンバリン 木琴 カスタネット キーボード

2. プレパレーションブック

a. プレパレーションブックの作成

4回目のセッションではこれまで通りA子の好きな遊びを実施しながらも、少しずつ、より具体的なプレパレーションの内容に踏み込んでいった。HPS は塗り絵形式のプレパレーションブックを用意した。このプレパレーションブックを用意した狙いは、治療のプロセスを視覚的に理解すること、また「塗り絵」という発達段階に見合った遊びによって、治療場面の一つ一つの絵を丁寧に色付けて治療の内容を詳細に把握し、A子の納得を得ることにある。

b. プレパレーションブックの内容

プレパレーションブックの表題は、「ぼうこう(膀胱)のけんさ(検査)は、どうやってすすむの?」となっており、内容は表 3 のように構成されている。プレパレーションブックを用いたことによって、遊びを通してA子が検査の必要性を感じられるようになってきた。検査の不安を和らげることができ、検査に立ち向かおうとする気持ちができると考えられる。

表3. プレパレーションブックの内容

ページ	内 容
1	病棟(びょうとう)で、検査着(けんさぎ)にきがえます。
2	時間(じかん)になったら、レントゲンの検査室(けんさしつ)へいきます。
3	先生が検査(けんさ)をします。
4	撮影(さつえい)台にねころがります。
5	外尿道口(おしっこがでるところ)を、2, 3回消毒(しょうどく)してきれいにします。つめたいです。→ばい菌(きん)はいなくなります。
6	一瞬(いっしゆん)、いたいと思(おも)いますが、そのあとはいたくありません。カテーテルという細い(ほそ)管(くだ)を、ぼうごうにいれていきます。
7	ぼうごうに、造影剤(そうえいざい)入れていきます。何回(なんかい)か写真(しゃしん)をとります。
8	ぞうえいざいで、ぼうごうがいっぱいになると、おしっこがしたくなります。おしっこが我慢(がまん)できなくなったら、先生に「おしっこがしたくなった」と言ってください。
9	さつえい台によこになったまま、おしっこをしてもらいます。リラックスしておしっこしてください。おしっこは、尿器(にょうき)でうけとめるので、だいじょうぶです
10	おしっこが上手(じょうず)にでおわったら、けんさはおわりです。病棟(びょうとう)にもどります。

3. 検査室への探検ツアー

5回目のセッションでは、実際の検査が行われる検査室へ探検ツアーを行った。ツアーの遊びの要素は、検査室までキャラクターの折り紙を見つけ、台紙に貼りながら行っていくところである。検査室では、医師より当日の検査の流れの説明を聞いたり、実際に検査で使うカテーテルの管を見たりした。

IV 結果

1. 遊びのプロセスと変化

a. 遊びの様子

はじめに、A子とのラポールを形成するために、A子が好きな遊びを一緒に行った。A子はシャボン玉遊びや風船に粉を入れる遊びが好きだったので、それらの遊びを行い易いように材料の用意やあそび空間を整備した。A子は病院の中にも関わらず、HPSは自分の好きな遊びを一緒にやってくれる人といった印象を持ったようで、次第に打ち解けてコミュニケーションをとるようになった。

徐々に信頼関係が形成されてきたので、HPSはA子自身の「キワニスドール(綿を詰めた白無地の高さ40cm程度の人形で、医師が子どもの患者に症状を聞いたり、治療の手順を説明したりするときによく使われる)」を作ってみることを提案した。A子のキワニスドールを遊びながら一緒に作ることで、今後の血液検査と膀胱尿道造影検査の手順や方法を納得し理解できるようにした。

b. かかわりの中間評価

3回のセッションが終わった時点のA子の変化についてまとめると、次の通りである。

①HPSと子どもとの信頼関係は構築されつつあった。つながりができたため、話をスムーズに聞き、内容を受け入れてくれるようになった。

②遊びの支援を重ねるごとに、A子は積極的になり、次回自分のやりたい遊びをHPSに伝え、病院に来ることを楽しみにするようになった。

c. 探検ツアーの結果

検査室への探検ツアーを行った結果、折り紙で作ったキャラクターを探していく遊びは、不安の軽減につながった。検査に対する不安なこと、わからないことを医師や看護師にA子自身が伝えることができた。それは言い換えると、A子自身が検査の必要性を感じていることの表れであると考え、再び検査についてのプレパレーションブックを用いて、A子とかかわる時間を持った。

2. 検査の当日

検査の当日までに、病院や治療に臨むA子の様子には、大きな違いが見られた。それまで見られた医療スタッフへの警戒心がなくなり、検査や治療に立ち向かおうとする気持ちが出てきた。母親は「子どもが病院に行くことを楽しみにしている」と話し、ホッとしている様子であった。

前回の外来診察後の遊び以降、検査の不安などは全く見られなくなった。検査の流れを家族にも説明していたため、自宅浴室で仰向けに寝て排尿する練習を母親とした様子である。今日も「早く病院に行こう」と言うほどだったと母親が話す。検査を待つ間は、母親とHPSと一緒に折り紙をして、検査室に貼るのを楽しみにしている発言が聞かれた。

HPSは当日の様子を記録していたが、最も注目したい点は、A子が検査中も折り紙で遊んだり、万華鏡を覗いたりして遊んでいることである。検査に入る直前まで本児が選択した活動で遊び、その遊びを継続させた形で検査に臨んだA子は、プレイ・プレパレーションを通して検査の内容を理解し、安心して検査に臨むことができたのである。検査後は疲れた様子を見せたものの、部屋に戻るとすぐに好きな遊びを始めているのである。もし、検査のために従来行っていたようなタオル抑制をしたとすれば、もちろん検査自体は終わっただろうが、怖く嫌な思いをただけでなく、自尊心を傷つけられたA子は、病院に対してネガティブな感情をもつ結果になっていることは容易に予想できるのである。この事例にあるような遊びの連続性がA子を検査に向かわせ、そして検査を必要なこととして受け入れる助けになっていたのである。

医師からは、以前の採血時のA子の様子からは想像もつかないほど、落ち着いて検査ができたことに驚きの声が聞かれた。このケースを通して、適切に計画されたプレイ・プレパレーションの効果を改めて再認識してもらうことができたと思う。

現在、A子の尿失禁は消失し、QOLが大きく改善された。

V 考察

HPS としてかかわった事例を一つ紹介したが、やはりこの事例を通して分かったことは、他の医療スタッフとの信頼関係を HPS 自身が築き、小児医療チームの一員として他職種との協働体制を作っていくことの重要性である。また、小児科病棟だけでなく、成人の病棟にも子どもが入院するケースがあるため、病院全体に HPS の活動をアピールしていくことの必要性も実感している。

今後は、かかわった子どもや家族に対して聞き取りや研究調査を行い、小児医療チームの一員として HPS は必要不可欠であることを証明していきたいと考える。

HPS が小児医療チームの一員として定着することによって、ひとりでも多くの子ども達が「病院って嫌なところじゃないよ」という気持ちを抱けるように支援していきたい。

VI 文献

蛭名美智子 編『小児看護 2008年5月号 特集プレパレーション実践集』へるす出版, 2008.

田中恭子 編著『プレパレーションガイドブック』日総研出版, 2006.

付 録(プレイセッションの様子)



写真1:風船に粉を入れて遊ぶ(5月29日)



写真3:プレパレーションブックに色塗りをして遊ぶ(6月19日)



写真2:スライム キワニスドール作り(6月5日)



写真4:探検ツアー(6月29日)